名古屋女子大学　紀要　**54**（人・社）149～159　2008

ジョセフ・ヒコの異文化体験と帰国（第１報）

山井 徳行

Sur les Experiences de la Culture Etrangere de Joseph HEKO et Son Retour au Japon Ⅰ

Noriyuki YAMAI

序章

ジョセフ・ヒコとは、日本名を彦太郎といい、1837年８月21日に兵庫県加古郡播磨町の百姓の家に生まれた。しかし、生後すぐに父が死亡し、母親は数年後に再婚した。再婚先は、比較的裕福な家で寺子屋に通わせてもらっていた。養父は船頭で、少年彦太郎も好奇心が旺盛になる12～13歳のころ船で旅する機会に恵まれた。しかし、そんな境遇が彼の運命を大きく変えることになった。

父親の知り合いの船頭によって率いられた新造船「栄力丸」にひょんな偶然から乗った13歳の少年は太平洋の暴雨のために２ヶ月近くも漂流し、命からがらアメリカの船に救助され、当時発展し始めていたサンフランシスコに着いた。外国への渡航が罪であった時代にアメリカに連れてこられてしまったのだ。ただ、漂流は珍しいことではなく彼と同じ運命に遭った日本人は他にも多くいる。

一つは若さ故の適応能力により、多分彼自身の利発さにより、今からでは想像できない異文化の壁を乗り越えて、アメリカの社会に受け入れられて行く。サンフランシスコの生活に慣れ始めたころ、彦太郎は彼のアメリカでの恩人となるMr. B. C. Sandersに出会う。彼は税関長であったが、同時に銀行の経営にも携わっている裕福な実業家でもあった。彦太郎を気に入ったSanders氏は自分の息子のように庇護を加えた。そして、２年弱の短い間とはいえ、正式な学校教育を受けさせてもらう。氏のお陰で政治家とも知り合った彦太郎はアメリカ大統領に会い握手をした最初の日本人となる。

1859年の幕末の混乱期に帰国した彦太郎はアメリカ人ジョセフ・ヒコとなっていた。アメリカ領事館の通訳として日本に帰国したヒコは独立して商売を始める。彼の当時の日本での活動は複雑だが、『海外新聞』という日本で初めての新聞を発行して、「新聞の父」としてたたえられている。

幕末から明治維新の混乱期を生き延びたヒコは、40歳のころ日本人女性チョウ子と結婚し、60歳で逝去している。

ヒコは他の漂流民と違ってきわめて高い適応能力を示して英語をマスターしアメリカの新聞を真似て横浜で日本最初の新聞を発行した。ある意味では、現在の情報社会の先駆けでもあった。だが、彼は新聞の発行も２年程でやめ他の事業に手を出し、あまり大きな成功も収めず、また明治の出世頭、伊藤博文とも親交を持ちながらも、政商になることもなかった。それなり

に裕福な生活を送りながらも明治維新への貢献度から予想されるような要職に就くこともなく意外に平凡な晩年を送った。

日本の新聞の父としてのジョセフ・ヒコに関しては、近藤晴嘉氏の詳細な研究[1]がある。その功績についてはそちらの研究に譲るとして、この論文では、彼が残した自伝「THE NARRATIVE OF A JAPANESE」[2]などを参照しながら、彼の異文化体験を検証したい。維新に通訳として重要な役割を果たした彼の英語力が優れていたことは明白な事実であろうが、現在の時点での第二外国語習得に関する研究を参照しながら検証してみたい。そこから、一平民として当時の先進国アメリカの社会で豊かな生活ができたのにも拘らず、なぜ日本に帰国したのか、という問題を考えてみたい。

彦太郎は幕府や藩から欧米の文化を移入するために派遣された使命感を負った人間ではなかった。そのまま帰国すれば罪に問われる危険性もあったし、何よりもそのことを彼は知っていた。同じ栄力丸で遭難して帰国した仲間は厳しい詮議を受け、不自由な生活を強いられた者が実際、多かったのである。

彼の帰国後の活躍を考えると、帰国の選択は全く当然のように考えられる。それ故に、彼がアメリカに残る選択肢は一顧だにされないというのが現実だろう。自分の国の貧しさを逃れて豊かな国に移民する経済難民は現代の国際問題の一つであることを考えると、豊かな国に偶然に流れ着いた彦太郎はアメリカに永住するという選択肢を持った筈である。何故、アメリカでの生活を選ばなかったのか。

彼のように、当時の平民の青年から見れば夢のようなアメリカ社会において、それも上流社会に足場を得る幸運に恵まれたのに、何故に多くの危険を冒してまで帰国しようとしたのだろうか。この観点がジョセフ・ヒコの意外な真実を暗示するのではないか。単に彼個人に関するだけではなく、日本人の外国体験の特徴をも示し得るかもしれないと思われる。

ここで問題になるのは、望郷の念という帰国への欲求と、異文化への適応度である。前者は故郷と家族への思いであろうし、後者は言語の壁の克服と人間関係の構築や生活の見込みでもあろう。このような観点から分析していきたい。

第１章　ヒコの生い立ちと漂流の事情

序章で簡単に触れたように、母親の再婚で船頭の養父を持つようになった彦太郎は寺子屋に通って読み書きを習っていた。彼には船乗りになった冒険好きの兄がいた。彦太郎は兄の土産話に彼自身の冒険心をかき立てられた。

My parents had two sons, of whom I was the younger. From his youth my brother had always been very fond of roving, and at last my step-father seeing the impossibility of keeping the boy quietly at home, apprenticed him at the age of 16 to his uncle, the captain of a large junk trading between Osaka and Yedo. The lad was quick to master his work, and in a few years' time he had worked himself up to be second officer on his uncle's vessel.

・・・My brother's talk and the praise bestowed upon him led me to think that if I too could travel, I might be received in the same way and made as much of by the villagers ; －besides, I thought often and wistfully of the different places I could see and the novel experiences I could have. Thus the first thought of rambling crept into my

mind, and from that moment my desire to leave home never ceased.（The Narrative of a Japanese Vol. 1, pp. 2-3）

心配性の母親は彦太郎の船乗り志望を受け入れず、商家で働けるように勉強に励めと命じた。そのようにして、「So I went quietly back to school and continued for two years or more」（id. p5）というように寺子屋に通っていた。初歩的な読み書き算盤であってもこの勉強は彦太郎が英語の勉強をするのに役立ったであろう。しかしながら、英語の新聞から記事を精選して翻訳して発行された『海外新聞』の編集に日本語のできる武士の力を借りていることから、彼の日本語の文章力はそれほど高くはなかったと思われる。1859年に帰国し、1863年に日本語で『漂流記』[3]を上梓しているが、彦太郎が口述して書き取らせたものである。アメリカの事情の説明が主であり、彼の異文化体験としてはNarrativeのほうがより一層興味深い。

1850年３月、船乗りの従兄弟に誘われて彦太郎は金比羅参りに船出する。少年にとっては村から出る最初の機会で、有頂天になる。時代がのんびりしていたらしく、楽しい観光の旅は56日間も続いた。しかし、母親の心配は並大抵ではなかったらしい。彦太郎が無事に帰って来たことを喜んでいる間に卒中で倒れ４日後５月18日に死んでしまう。彦太郎は1837年８月21日生まれであるから、まだ13歳になる前である。彼と血の繋がった肉親は兄一人となった。養父がいるといっても、漂流の前に生みの親が二人とも死んでいるということは考慮に値する事実だろう。彼の帰国は親との再会を意味しなかったのだ。

彦太郎が船乗りになることに反対していた母親の死後、養父は彼を江戸へ連れて行く。外の世界を見たいという冒険心は金比羅旅行以来、ますます強くなっていた。

This trip to Yedo was just what I had long been wishing for, as it would give me a chance to see more new places and things, and my journey to Miyajima had only whetted my appetite for travel.（id. p. 25）

同年の９月の初め、養父に伴われて「住吉丸」という酒を運ぶ船に乗って江戸に向かった。江戸への航海の途中、紀州熊野の港で悪天候を避けていると、万蔵が船頭をしている新造船の「栄力丸」に出会う。彦太郎をよく知っている同郷の船員たちが乗っていて、彼を気に入った船員たちは新しい船を見学させそして彼を自分たちの船で江戸に運ぶという提案をする。彦太郎を手放したくなかった養父も知り合いの船員たちの懇願に負けて、彦太郎の船替わりを許可する。結果的に見ると、これが養父と彦太郎の今生の別れになり、ジョセフ・ヒコ誕生の伏線となった。栄力丸は新造船の威力を発揮して４日早く江戸に着いた。10月20日、江戸見物をして帰途の旅に着いた時、養父の船住吉丸が江戸に着くが、二つの船はすれ違った。

10月30日の夜、遠州灘で嵐に遭い栄力丸は遭難する。12月21日にアメリカの商船オークランド号（Auckland）に救助されるまで２ヶ月弱の間、漂流する。自伝によると遭難から数日後に伊豆諸島の一つに接近したとある。船頭万蔵は、その島に人の住んでいる気配が見えなかったこともあり、新造船を見捨てる決心が付かずに上陸を諦める。それもまた運命の分かれ道であったかもしれない。とにかく、17人の栄力丸の乗組員はアメリカの船に助けられたのであった。彼らの異文化体験の始まりである。

Her（the vessel）officers and crew were on deck and appeared to be very different from any people we had ever before seen, or even heard of. We were all more or less alarmed at the whole effect of the strange vessel so huge and black, and the strange creatures on board of her, who might be, for all we knew, no human beings at all.（id. p. 56）

第２章　アメリカ人との接触と戸惑い

オークランド号の乗組員は、船長と２人の航海士、６人の水夫、一人の中国人コック、１人の見習いで、合計11人であった。船長はじめ皆は親切で栄力丸の遭難者は丁重に扱われた。しかし、言葉の壁は恐怖を鎮めることができず、食料が尽きたときには食べられてしまうのではないか、などと思ったりする。

Some thought they might eat us, but others said the vessel had provisions enough, since the Captain had pointed to the hold a few minutes before, and as we had been drifting for fifty days or more, it could not be long until we reached the land.（id. p. 67）

オークランド号がサンフランシスコに到着するのはそれから42日後である。外国文化に触れたことのない17人の日本人はアメリカ式の生活を余儀なくされる。船長や航海士が緯度や経度を測量している様子を観察して議論したり、食事のあと甲板を歩いているのを見てその意味を推測したりしているのを見ると、彼らの健全な好奇心の発露を見る思いだ。船乗りとして西洋船の便利さに感心してその原理を理解しようとしている点には、優秀なものを学ぼうとする当時の日本人の健全さが現れている。

当時の日本は仏教の強い影響下にあって肉食は禁じられていた。一方、アメリカの食生活に肉は不可欠である。それでなくても食材が限られてくる航海では、この問題に直面せざるを得ない。

救助されたその日の昼に、彦太郎は見習いの少年からパンにバターを塗り黒砂糖をまぶしたものを与えられるが、その悪臭ゆえに食べることが出来なかった。同時に与えられたスープを美味しいと平らげたが、あとで仲間の１人がその中には牛肉が入っていて不浄だと言う。四足の動物の肉を食べた者は少なくとも75日間は神に祈ることは出来ないと責められて、彦太郎は悩む。彼が痛む良心を慰めたのは、「知らぬが仏」という格言であった。動物の肉とは知らずに食べたのだから許されると考えたのだ。その日の夕食で17人全員に塩漬けの肉が出されたが、誰も手を付けない。その２日後の朝、彦太郎を不浄な肉を食べたと非難したその男が、出された塩付けの肉を食べ始めた。ジョセフ・ヒコは次のように描写している。

He said that although it was not right, according to our country's customs to eat, even to touch such unclean food, yet "when one comes to '*Go*', he must do what '*Go*' does,"（i. e. Do in Rome as the Romans do） and so saying so he plunged his knife and fork into the meat, cut away a piece and ate it, and relished meat ever afterwards more than any of the rest of us. After I saw him, and others too commencing to eat meat, I felt more contented and happy about the matter of my having eaten some that first day, and my conscience ceased to reprove me; still for a long time I did not touch any meat.（id. p. 77）

自伝の中で、西洋の食物に関しての叙述は少ない。後に、体によいからと牛乳を勧められて好きになったという簡単な話が出てくるくらいである。彦太郎はその年の若さもあってごく自然にアメリカの食生活に馴染んでいったと考えていいだろう。ただこの問題は、好き嫌いや習慣の問題のほかに、宗教的な問題を孕んでいる。四足動物の肉を食すことは不浄なのであって、神から咎められる性質の罪なのであると彼らは考えていたが、彦太郎を責めた本人が「郷に入っては郷に従え」という処世術の知恵で率先して肉食を始めたのである。他に食べるものが無く

なったという切羽詰った状況があるわけではない。救助されて３日目の朝の出来事である。他の男達も特に異議を唱えることもなく肉食を始めている。

海の男たちの解放的な気質も影響しているだろうとは推測されるが、やはり汎神教的な仏教の性質を考慮に入れる必要がある。仏教の肉食の禁忌は、イスラム教における豚肉の禁忌に比較すると非常にゆるいと言わざるを得ない。仏教徒としての彦太郎は、内的な激しい葛藤なしに食事上の宗教的禁忌を超えて適応して行った。一神教徒の場合と比較するとそれは不敬な感じさえ抱かせる。

彦太郎は髷を結っていた。そして、親切な二等航海士にその髷を切られてしまう。そのときも、言葉が通じない誤解が原因であったと考え、また彼が自分の洋服を彦太郎のために仕立て直して着せてくれたという過去の事実から相手の善意を疑わない。生きて祖国に帰れた暁には、その髷を神に奉納するという誓いを立てていて、それが実行不可能になったといって不満を述べているだけである。洋装をさせられたり、髷を切られたりすることによる文化的なアイデンティティの喪失といったものを体験したようには思えない。

ちなみに、アメリカの船には中国人のコックが乗っていたが、かれは辮髪をしている。アメリカ人の間に長く暮らしていると推測されるが、清朝の風俗に始まった中国文化のアイデンティティと考えられる髪形を放棄していないのだ。

救助船での生活の描写からうかがわれるのは、彦太郎がアメリカ人から可愛がられたということだ。そのような性格と容貌を持っていたのだろう。

オークランド号は予定通りに1851年2月の初めにサンフランシスコに着いた。17人の乗組員はアメリカと出会い始める。当時、発展し始めていたサンフランシスコの街とそこで活動するさまざまなアメリカ人達である。税関の役人や密輸監視艇の乗組員、少し粗野な沖仲士達が珍しい動物を見るかのようにやってきた。もっとも、本人たちも始めはオークランド号の人達を人食い人種のように考えていたのだから、どっちもどっちである。彦太郎がその街で黒人（鎖でつながれた囚人の一団だったが）を見たときの印象を、驚きを持って次のように書いている。

Its black face and white teeth with and huge red lips, which formed such a contrast with its soot-like face were fearful and dreadful. I thought it was not human, and fancied it must be more akin to *Oni*(a Devil)than anything else. (id. p. 90)

白人のアメリカ人が好奇心を持ったとしても不思議はない。そんなある日、漂流民と仲良くなったアメリカ人の船長が彼らを舞踏会に招待した。日本の衣装を着て来てほしいという。サンフランシスコの街に上陸して、アメリカ人に会ってみたいという気持ちと救助された身分で断れないという気持ちもあり、舞踏会の会場に向かった。舞台に上げられてベンチに座るようにいわれた。前にはカーテンが降りており、その向こうではアメリカ人の陽気な話し声が聞こえていた。見世物にされるのではないかと疑いだした者がいた。

We remained quietly seated for a few minutes when some of my companions began to get angry. And, one would say to another:-"This Captain of the store ship pretends to be our friend, but he is not. For he has brought us here to make a show of us and to make money."

So some of them started up in hot passion, meaning to quit the place, but our own Captain stopped them, and pacified them by saying that we were under obligation to the strangers by reason of their picking us up and feeding us, and that therefore

it was not a serious matter if they did make “show” of us to make money.

In the midst of our Captain's remarks the curtain was drawn aside, when to our great surprise and amazement we found ourselves in front of a perfect sea of faces. They all looked at us with eager eyes for some minutes, and then turned to each other talking and laughing and gesticulating. (id. pp. 94-95)

見方によっては見世物にされたのだが、それはもちろん見世物興行のためではなかった。アメリカ人船長はこのように漂流民を街の人達に紹介し座を盛り上げて参加者の慈悲心を刺激しようとしたのだろう。舞台での紹介が済むと、船長に促されて群衆の中に入った彼らは、飲食を勧められる。そのうちにダンスが始まり座が盛り上がっていく。彦太郎は若い青年にお金をもらい、勧められるままにルーレットゲームをする。３回続けて勝った彦太郎に、これくらいで止めた方がいいと助言して若い男はさわやかに去っていった。よほど印象に残ったのか、彦太郎の言葉に愛惜の感が出ている。その舞踏会で親切にしてもらったのは彦太郎だけではなかった。皆が金やナイフ、ピン、ブローチなどをプレゼントされ、最初の猜疑心などすっかり忘れ大満足で船に戻った。

アメリカ人たちは特別の思惑なく哀れな異国の漂流民に親切にし、暖かくもてなしたのである。もっともこの話には後日談がある。ダンスパーティの翌日、彦太郎はプレゼントされた物や金を仲間に見せ自慢した。彼が一番多くのプレゼントをもらったのであった。それをオークランド号の第一航海士が見ていた。そして、彦太郎はせっかく得た15ドル50セントを巻き上げられてしまう。この話も印象が強かったのか、彦太郎はかなりの行を割いて詳述している。オークランド号の乗組員が皆、親切であったといっても、いろいろな人間がいることもきちんと体験し観察していたのだ。

彦太郎や仲間のアメリカ体験は、サンフランシスコの街の近代性や活気とアメリカ人たちの親切な待遇によってきわめて肯定的だったといえよう。万蔵船長の言葉にも現れていたように、救助してもらい面倒を見てもらっているだけでも運がいいと考えて当たり前なのだろうに、厚遇を得ていたのだから。

そこにアメリカ政府の政治的な意図が介入して、この厚遇はさらに続いていく。オークランド号が新たな航海に出発する頃には、港の徴税官（Mr. King）が漂流民の処遇についてワシントンに問い合わせた手紙に対して返事が来ていた。日本との友好条約締結を目指すアメリカ政府は漂流民を手厚くもてなし、その交渉を有利に進めたいと考えた。ペリーの黒船が浦賀に現れるのはダンスパーティの２年と数ヶ月後である。彼らは帰国の用意ができるまで、サンフランシスコの港で政府の費用によって快適な生活を保障されたのだった。彼らが移された密輸監視艇（Revenue Cutter）、ポーク号（Polk）は武器を積んだ鉄製の船で、なれない彼らは威圧されて航海士の差し出す手に反応できない者もいたほどだった。600トンの立派な船で、一人の船医も含め全乗務員が60人以上であった。彼らはたいへん親切だった。その親切さに疑念が浮かぶほどだった。

In fact according to our notions we were treated over-well, and one day a great discussion arose among us at to what the object of the foreigners might be in so dealing with us. And on would say to another that the strangers were fattening us for their future meat, and another would say that that surely could not be. (id. p. 103)

人食いの概念がここでも持ち出されているのは、異人に対する違和感が簡単には払拭されないことを暗示している。議論は年長者の船頭万蔵の次のような言葉で終わった。

“These men,” he said “are simply good and charitable people, and are kind to us, because they know that we have lost everything and that we are strangers in a strange land, and helpless as the year-old infant in that we understand not nor speak the speech of their land.”（id. p. 103）

当時は、アメリカ政府の意図を知る由もなかった彼らにしてみれば当然の結論だったと思われる。ワシントンの政治的な思惑は成功しつつあった。だが、後年香港にて他の船に移された時、中国人との接触が多かったアメリカの乗務員から冷遇されて、脱走をする者も出た。その時でも、ワシントン政府の意図には変化がなかったことを考えると、サンフランシスコのポーク号のアメリカ人は政治的な意図などと関係なく、親切な人達だったのだろう。とりわけ、先任衛生伍長（master-at-arms）のトーマス・トロイ（Thomas Troy）というアイルランド系のアメリカ人が何かと親切にしてくれた。日本語を勉強して日本に住みたいという。

第３章　How are you?と「かわい」の間

異文化に適応するための鍵は言葉である。漂流前は英語をまったく知らなかった彦太郎や彼の仲間はいかにコミュニケーションをとったのか。次のエピソードは現在では想像もつかない状況を示している。サンフランシスコに船が着いた直後の話である。珍しさに彼らを見ようといろいろな人達がやって来た。

These are more civil than the others who had come on board thus far; they came up and shook hands with some of us saying as they did so “How are you?” This sounded to us “*Kawai*” which in our language means love or sympathy. When we heard this word we fancied they understood our language, and some of us began to talk to them. But they gave us no direct reply, except that now and then they smiled.（id. p. 88）

信じられないような話であるが、英語と日本語の音素の違いを象徴的に示していないか。日本語を母語とする人間にとって、英語の発音の把握がどれくらい難しいのかをよく示している。しかし言語的な相違からくる難しさだけではなかった。当時の政治的障害が横たわっていた。特に親切に面倒を見てくれるトーマス・トロイが英語と日本語の交換授業を望んでやって来ても、日本語を教えることには熱心になったが、英語を学ぶことに対する恐れがあった。幕府の鎖国政策のために、外国の文物や言語について知っている者は帰国すれば、捕らえられて厳しい詮議を受けると考えられていた。船乗りとして生活する者の間では幕府のこの政策が知られていても不思議ではないし、それは当時の実態でもあった。トーマスに英語を習い始めた彦太郎は、仲間に止めるように言われる。帰国すれば本人はもちろん、仲間も危険な目に遭うと諭されて彦太郎少年は諦めるより仕方がなかった。

And from that time forward I did not attempt to learn English whilst I was with the rest, which was a great drawback to my interest.（id. pp. 105-106）

このことは英語学習の観点からは残念な結果をもたらす。ポーク号で生活する約１年間の間とサント・マリー号に乗ってマカオに行き日本への帰国を待つ間、彦太郎は英語を正式に勉強しなかったのである。マカオからの帰国の目処がたたず、トーマスからアメリカへ戻ろうという提案を受け入れたのが1853年の10月であり、この間、１年半以上にもなる。仲間と一緒では正式に活字を覚えながら勉強することは不可能であろうが、アメリカ人たちと一緒に生活する

のだから、会話などは自然に覚えたと思われる。トーマスの日本語が上達して意思の伝達にはそれほど問題はなくなっても、それでは一緒に生活できないのだから、自然と覚えたと考えるのが普通だし、最年少の彦太郎の受容能力が高かったと考えても無理はないだろう。事実、彦太郎よりも先に帰国を果たした仲間は幕府や藩の役人の詮議を受け、覚えた英単語を言わされている。[4]

ここで特記しておきたいのは、英語学習と帰国願望の矛盾である。帰国したあとの処遇を考えると、英語学習は帰国者には危険なのである。アメリカ生活に適応しようと英語を勉強することは帰国を妨げることになるという考えである。もちろん幕末から明治にかけて時代は大きく変わりつつあったが、彦太郎にはその情勢が理解できていたとは考えられない。英語を学びアメリカ生活を体験したことが後のジョセフ・ヒコを作り出すのだが、それは結果論である。彼の中に、英語を勉強すればするほど帰国は難しくなるという二律背反の考えが根付いていたことは確かだと認めなければならない。

セント・メリー号で1852年５月の末にマカオに到着した一行は、そこでペリーの艦隊に移されて日本に向かう予定であったが、さまざまな事情でペリーの艦隊の到着が遅れてしまう。実際に到着したのは翌年の４月であった。そこでマカオに着くと東アジア艦隊の旗艦、サスクワハナ号（Susquehanna）に預けられる。ここでの待遇は極端に悪くなった。しかも、長く待たされることになったのである。

このこともジョセフ・ヒコ誕生の重要な契機だった。もしペリーの艦隊に予定どおり乗っていたら、彼はそのまま日本に帰国した可能性が高い。実際にサスクワハナ号でペリーと一緒に日本に行った乗組員の１人、仙太郎は日本の役人から引き取りを申し出られている。アメリカ人は本人の自由意志に任せるとしたが、仙太郎本人は帰国を望まなかった。彼は、帰国すれば処刑されるという脅迫観念に捉えられていたらしい。アメリカ側は日本の役人に帰国後もけっして危害を加えないという誓約書を求め、日本側も承知した。しかし、仙太郎本人が承知しなかった。ただ恐怖に体を震わせているだけだった。それほど、外国での漂流後の帰国は恐ろしいものだったと感じられていた。[5]だが漂流民16名（船頭万蔵は４月に63歳でハワイ沖にて病死した）がペリーの艦隊によって日本に連行されていたら、全員、帰国できた可能性が高い。そうなれば、彦太郎が再度アメリカにわたり教育を受けることはなかったのである。

サスクワハナ号での待遇について次のように述べられている。

For the Susquehanna people were rough and unkind to us. And the reason for that we found from Thomas to be this : —

The Susquehanna had been for long upon the China Station, and had become accustomed to deal with Chinamen. Now the Chinese are a greedy and a cringing race, and to make money will submit to any treatment,—even to being kicked and beaten like beasts. Wherefore the people of the Susquehanna fancied that we were folks of the same spirit, or rather want of spirit, and they treated us in the same fashion as they treated the Chinese.（id. pp.114-115）

ある夕方、あまりの暑苦しさに耐えかねて、アメリカ人の船員と同じように甲板で寝転んで涼もうとしたとき、彼らは屈辱的な目に遭う。

But when the eyes of the officer of the watch fell up us he shouted out something in a loud voice. Then he kicked us with his shoes and pointed down for us to go below. Thus we were driven down to our quarters on berth-deck like a herd of swine.

This made us wrathful. But that was all.（id.p. 116）

このような辱めを受けても耐え忍ぶしかない人質の身分を呪うしかなかった。このような状態で帰りの船を長いこと待つことは非常に苦痛なことであった。

そして、サスクワハナ号はマカオから香港に移動してペリーの艦隊の到着を待っていたが、その香港で重要なことが二つ起こった。一つは香港に定住していた力松との出会いであり、もう一つは脱走事件である。[6]

ヒコのNarrativeの中にはこの力松との出会いに関して叙述がない。ただ、力松の家を訪ねて協議したと簡潔に記されているだけであるが、漂流民に関して造詣の深い春名徹氏の『漂流』に詳しく記されている。１年以上も異人の中で暮らして、それもサスクワハナ号で屈辱的な扱いに打ちのめされていた彼らの前に、当時31歳で異人のような外見の日本人が登場した。力松は漂流してからすでに17年が経ち、一度は日本に帰国しようとしたが、打ち払われたという経験を持ち、英国市民として香港に定住していた。さらにアメリカ人を妻としており３人の子供があった。彼が一行に勧めたのは帰国を諦め、香港に定住するという奇想天外なものであったが、彼自身の存在がその可能性を実証していた。反対の視点から見ると、帰国することの危険を象徴していた。力松は一行がうすうす感じていた「西洋の誘惑」を象徴していると、春名氏は述べているが、その通りだろう。貧しい日本に帰るよりも進んだ西洋社会で生きていくことの魅力である。とりわけ若い者には刺激が強かったに違いないし、無意識な誘惑が明確に意識されるようになったとしても不思議ではない。事実、若い３人は今まで苦労をともにした仲間と離れてアメリカに戻っていく。

もう一つの事件は、サスクワハナ号の待遇に耐えかねて香港から陸路で南京に渡り帰国しようという企てが行われた。もっとも決行組は８人で残りはサスクワハナ号に残りペリーの艦隊を待つことにした。そして、早く帰国した者が他の者の消息を家族に知らせるということで合意した。しかし、この脱走計画は失敗する。香港の田舎で追剥に身ぐるみ剥がされるというお粗末な結果に終わる。彦太郎は決行組に入っていなかったが、その顛末を詳しく語っている。ここでは、それほどに彼らの待遇が悪かったことを示すにとどめたい。

ジョセフ・ヒコの誕生にとって大切なことは、脱走事件の失敗後、彼ともう２人（亀蔵と次作）がアメリカに渡る決心をしたことである。彦太郎が15歳、亀蔵27歳、次作（NarrativeではTora）29歳であった。この３人の再度のアメリカ行きに関しては謎が多い。亀蔵などは上の決行組の１人である。それほど帰国したがった人間がどうしてアメリカに引き返すことになったのか、彼らの心の動きを正確に捉えることは不可能であろう。サスクワハナ号を離れて帰国の船を捜そうとしたが、結局アメリカに再上陸する羽目になったという仮説も成り立つ。春名氏の「西洋の誘惑」を挙げることもできる。若い者が誘惑されたと考えると辻褄があう。事実は上の３人が別行動をとりアメリカに再上陸したことである。また、日本贔屓のトーマスなしではこのようなことは考えられない。漂流民と昵懇になり高給を投げ打って香港やマカオまで彼らに同行してきたアイルランド系の人のよいアメリカ人はペリーの艦隊の到着を待つ間に、音をあげてしまったのである。彼は日本人には知らされない情報を得て、まだ１年近くも待たされることを知ったのだろう。

While lying there, our friend the interpreter Thomas got tired of waiting for Commodore Perry's squadron. He wished to get back to California before the gold fever was over, to make money. One day he explained his purpose to me and asked me to accompany him, offering to pay all my expenses. He said that if I went with

him I could learn the English language, and that in a few years Japan would surely be opened, and then I could go back without any fear. He pointed out that it was for my own interest as well as for the interest of the Government of Japan that I should return with a full knowledge of the foreigner's language.

But I was still young and did not know the advantage of what he proposed. So at first I declined to go since I was afraid to leave all my countrymen to go afar among strangers. He then asked me if I would go if he took one of my companions also. To this I said, "Yes", and then he selected Kame who after me was the youngest of the party. Then one called Tora asked Thomas to take him too, and he consented to do so.（id. pp. 120-121）

このあと３人は仲間に相談して一応、承諾を得る。もっとも、この出来事に関しては異論がある。他のメンバーの記録などを検討した春名氏は、全員がサスクワハナ号から離れて帰国する別の道を探していたがトーマスとのやり取りで誤解が生じたのではないかと推論している。[7]Narrativeも1895年に上下巻が完成した書物で、ヒコの記憶の変容も考えられるが、その叙述は明らかにその仮説と矛盾する。ただ、ヒコの自伝の内容にも腑に落ちないところが多い。まず、いくらトーマスが日本贔屓でもアメリカに帰るためにその旅費を自腹で払ってまで、なぜ３人の日本人を連れていきたかったのか理解できない。ゴールドラッシュのカリフォルニアで一儲けしたいと考えたならば、すなわち金儲けが目的ならば、高額な他人の旅費を肩代わりすることは矛盾である。香港で見つけた船の切符は一人あたり50ドルであった。このほかに船を見つけるまでの旅費や宿賃などもトーマスが払ったらしい。ちなみにトーマスはセント・マリー号で月給12ドルだったという。

また、帰国に拘っていた一行が、議論があったとはいえ３人のアメリカ行きに賛同するのも頷けない。もっとも、賛同した一同もそのほうが早く帰国できるかもしれないと言ったとあるから、彦太郎はトーマスの提案を正直に打ち明けていなかったかもしれない。

振り返ってみれば、アメリカ船に救助されサンフランシスコで１年以上も待たされ、やっと香港にやってきたのである。サスクワハナ号での待遇がいくら悪かったとはいえ、帰国を一時的にも諦めることになるアメリカ行きは非合理的な行為である。そのような行為を人間にさせるのは情念のいたずらなのであるとしたら、「西洋の誘惑」が働いたと考えるのが妥当であろう。自伝にある、「通訳として働けば、日本のためにも本人のためにもなるし、２～３年後には日本が開国して安全に帰れるようになる」というトーマスの説得も日本で通訳として活躍した自分の経験が言わせているようにも思われる。少なくとも、それはアメリカでの長期の滞在を意味したし、「西洋の誘惑」に身を任せる格好の言い訳にもなる。なにはともあれ、４人は1852年12月の始めにサンフランシスコに戻った。

帰国の日から、彼らは職探しに奔走する。そこでの知り合いの船乗りも相談に乗ってくれ、トーマスは３人の落ち着き先を探し回る。金を稼いで故郷に錦を飾るという目的がはっきりすると心も決まり行動もしやすくなる。15歳の彦太郎は異国での孤独感の中で成長する。「I must now play the man」と自分に言い聞かせる。鮮やかな自己意識の目覚めであった。（以下続報）

注

1）近藤晴嘉『ジョセフ・ヒコ』吉川弘文館、1986年
2）JOSEPH HEKO，THE NARRATIVE OF A JAPANESE，edited by JAMES MURDOCH，M.A. VOL.1 and 2，
3）『異国漂流記集』所収、吉川弘文館、1962年
4）春名徹『漂流―ジョセフ・ヒコと仲間たち』角川選書、1982年、p.221
5）同上、p184-194
6）同上、第六章　分裂、pp.111-128
7）同上、pp.124-126